

# 「バイोजパン2013」開催・参加報告

## －基調講演ならびにアジア製薬団体連携会議(APAC)の創薬連携に関する活動について－

## トピックス

バイोजパン2013ワールドビジネスフォーラムが2013年10月9日～11日にパシフィコ横浜で開催されました。「バイオ新産業革命を目指して」と題して、多数のセミナーやアカデミックシーズ発表会、バイオベンチャー中心の発表の場が企画されました。製薬協も主催団体の1つとして参加し、製薬協加盟会社から多くの方々が発表するとともに、多くの会社・団体がアライアンスブースを出展し、アカデミアやベンチャーなどと面談するなど、活発な交流が行われました。今回、製薬協ではアジア製薬団体連携会議 (APAC) の創薬連携に関するセミナーを企画するとともに、アジアからの参加者と意見交換の場を設けて活用しました。

バイोजパンはわが国の国際バイオ総合イベントであり、2013年で15回目を迎えました。バイオインダストリー協会を中心に、製薬協を含めた9団体からなる組織委員会による主催で、「バイオ新産業革命を目指して」との副題のもと、多数のセミナーやアカデミックシーズ発表会、バイオベンチャー中心の発表の場を通して活発な交流がありました。過去最大規模とのことで、アカデミア、バイオベンチャー、バイオクラスター、行政関係者、製薬・化学・食品などの各企業などから多くの参加がありました。特に、欧州からの参加が増加したとのことです。出展・パートナーリング参加企業数607社（うち海外から203社）、パートナーリング参加者数は1,054名、来場者数は12,487名（延べ人数）でした。面談成立数は4,747件で、アジア最大級のマッチングイベントとなりました。主催者セミナーほか、多くの企画がありましたが、ここでは基調講演、ならびにアジア製薬団体連携会議 (APAC) の創薬連携に関する活動を報告します。

### バイोजパン2013 基調講演

開会式後、基調講演として、まず「科学技術イノベーション創出環境の革新」と題して原山優子内閣府総合科

(写真提供：バイオインダストリー協会)



基調講演の会場

(写真提供：バイオインダストリー協会)

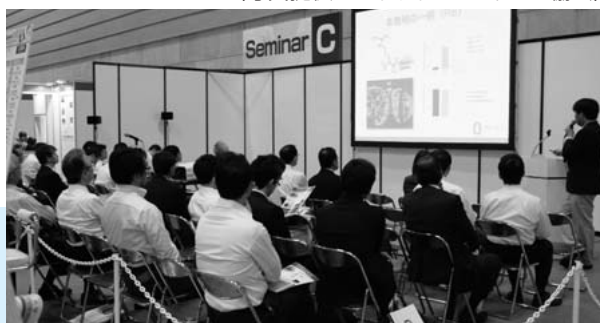


展示会場ならびにアカデミックシーズ発表会場を上から

学技術会議(CSTP)議員が講演し、「多くの課題の中で、科学技術イノベーションを利用して未来を切り開くために『科学技術イノベーション総合戦略(STI)』が策定された。課題解決型のSTIに基づく諸政策を推進するには、予算配分権を含めてCSTPの司令塔機能の強化を図る必要がある。その実現に向けて、戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)および革新的研究開発推進プログラム(ImPACT)をうまく推進しないといけない。パラダイム変化を起こすようなアイデアに資金を投下していきたいと考えており、皆さんに期待する」という内容でした。

次にLim Chuan Poh氏(Chairman, Agency for Science, Technology and Research [A\*STAR])は、「Singapore's Biomedical Sciences Journey -A Decade Later-」と題して、「シンガポールはR&Dの充実に力点を置いてきており、21世紀に入ってからメディカルサイエンスに注力した。これは、アメリカ西海岸での隆盛に加えて、産業構造の分散化に適していると考えたからである。この分野への投資が実を結び、2012年にはこの分野における生産額は10%にまで成長した。雇用も伸びるとともに、海外からの投資が増えたことは非常に大きい。研究成果からトラン

(写真提供：バイオインダストリー協会)



アカデミアのシーズ発表会の一コマ

(写真提供：バイオインダストリー協会)



面談ブースが続くパートナーリング会場

スレーショナルリサーチへの展開がうまく進み、それらをいかに社会に還元するかが問われている。われわれを成功に導いたものの1つは政府の強い関与である。Research, Innovation and Enterprise Council (RIEC) を設立して海外企業の活動環境を整え、地域全体のレベルアップを図った。海外からの人材を呼び込むとともに、育成に努め、結果としてコーディネーションのとれた運用が図られた」と、アジア市場の拡大とオープンイノベーションが進む中でのシンガポールの揺るぎない自信を感じさせる講演でした。

3人目の古森重隆氏(富士フィルムホールディングス(株)代表取締役会長・CEO)は、「写真フィルムからライフサイエンス事業へ」と題して、「会社の事業構造の変換と改革が求められ、社内の写真フィルム技術を徹底的に分析して、競争力をもちうる分野を絞り込んだ。光感受性の高機能素材、ならびに多くの種類の高機能素材の塗布によって構造化するエンジニアリング技術、この2つを大きく進化させて、化粧品、医薬品、ならびに再生医療などの分野に拡大して、従来X線画像診断などが中心であった事業が大きく変わった。たとえば、ナノ乳化技術は化合物の水溶性を大きく上げることを可能にし、薬剤の体内への取り込みを大幅に上昇させました。このように進化した技術を産官学連携により、さらに発展させたい」と、バイオ新産業革命を目指して力強く講演しました。

### アジア製薬団体連携会議(APAC) 創薬連携活動の報告

製薬協は2012年に、『革新的な新薬をアジアの人々に速やかに届ける』をミッションとしたAPACを設立しました。その具体的な活動として、規制許認可と創薬連携に関するワーキンググループ(WG)を立ち上げ、活動しています。

今回、オープンイノベーション関係者が多く集まるバイオジャパン2013において創薬連携WG主催のカンファランスを第2日に開催しました。聴講者はアカデミア、ベンチャー企業、製薬会社を中心に定員

120名(うち60名は一般参加)。テーマは、『オープンイノベーションは、どうアジアの創薬を促進するか?』のもと、5名の演者による講演がありました。APAC創薬連携WGの渡辺敬介リーダー(武田薬品)によるAPACにおけるオープンイノベーションについての発表に続いて、産と学をつなぐコーディネーターをしている荒木寛幸先生(徳島大学 産学官連携部門 准教授)からアカデミアの役割について、Dongho Lee氏(CEO, Korea Drug Development Fund)からインキュベーターの役割について、Youe-Kong Shue博士(Vice Chairman and Principal, OBI Pharma台湾)よりアジアからの創薬の推進におけるベンチャーの役割について、最後に坂田恒昭氏(塩野義製薬)から企業における研究提携について、講演(各15分)がありました。続いて、APAC創薬連携WGメンバーのGlen Argyle氏(武田薬品)の司会のもと、演者によるパネル・ディスカッションが40分間行われました。

このセミナーに加えて、APAC創薬連携に積極的な台湾との二国間会議を10月9日に行うとともに、10月11日にはAPAC創薬連携WGの全体会議を行いました。

アジアからの創薬という壮大な目標に向かって進もうとしている中、オープンイノベーションの具体的な促進の「場」としてバイオジャパン2013を活用することができました。

今回は基調講演とAPAC創薬連携に関する活動報告に絞った報告となりましたが、会場では大学の出展とミニ発表会の場も多く、大きなセミナーも数多い中、展示場フロアで聴衆を前に発表している大学の若手研究者の姿は、アカデミアと産業との連携が少しずつ実際に動きつつあることを実感させました。比較的規模の大きいバイオジャパンが産官学連携に関してさらに大きな役割を果たすことが期待されます。

次回の「バイオジャパン2014」は2014年10月15日(水)～17(金)、パシフィコ横浜で開催されます。(研究振興部長 吉田 博明)